



## 復活節第5主日 (ヨハネ 15:1-8)

わたしにつながっていないさい

「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」(15・5) この言葉は田平教会献堂百周年をいよいよ迎えるわたしたちに、終盤の準備の仕方を教えてくれています。イエスが教えてくださる準備の仕方を学び、教会献堂百周年の豊かな実りを期待しましょう。

私たちはここまで、一人ひとりの祈りと犠牲の積み重ねで、いよいよ教会献堂百年を迎えようとしています。ゴールは目の前で、きっと成功すると思っています。ただ、見た目の成功に一喜一憂するのではなく、イエス・キリストの物差しに照らして、実りある日を迎えるかが問題です。イエスは、「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」と言われています。私たちがイエスを通じて御父につながり、一つの神秘体として奉仕するとき、イエスの物差しにかなった実りを得るのです。けっして、見た目の華やかさに惑わされず、イエスの言葉に動かされて一人ひとり役割を果たし、喜びのその日を迎えたいのです。

最近はどうすでに、「田平教会献堂百周年の祈り」も板についてきたことでしょうか。しかしそこに落とし穴がある。スラスラ言えるようになると、隣の人を唱えている声は気にもかけなくなるかもしれませんね。慣れっこになった人が、隣の人を祈りのペースが遅く感じ、イライラを募らせて唱えているかもしれません。

もしそうであれば、その人の祈りは、キリストにつながっていると言えるでしょうか。キリストを通して御父につながっていると言えるでしょうか。むしろ、耳を澄まして、隣の人とも声を合わせて、祈りを唱えるべきでしょうか。

ラテン語のミサ曲を含め、歌の練習をしています。「どうせ言葉がわからない」とか、「私は歌が歌えない」とか、自分を押しえつけるような言葉で縛ってしまっていて、練習をおっくうに思っていないでしょうか。大きな声で、奉仕のつもりで練習に参加してくださるなら、私たちの歌声は、キリストにつながって実りをもたらすと思います。

こうしたことは、目には見えません。目に見えないけれども、「心一つにして祈っているか、歌っているか」は、聞こえてくる祈りでわかるのではないのでしょうか。当日、ミサを司式してくださる大司教様が、「今日の典礼は皆さんの心一つになっていてよかった」と喜んでくださる一日にしたいと思います。

私たちがキリストを通して御父につながり、豊かに実を結ぶためにすぐにはできません。それは一つの食卓から食べるということです。ぶどうが実るのは一つの木につながっているからだと思いますが、私たちが一つの食卓から食べるならば、一つの心、一つの思いになれるのではないのでしょうか。

言うまでもなく、「一つの食卓」とは、ミサのことです。みことばと聖体をいただくことです。みことばの食卓から、また聖体祭儀が行われる食卓から、皆が一つのパンをいただくなら、私たちの働きは一つの心、一つの思いになるのではないのでしょうか。

「豊かに実を結ぶ」その日はもう目の前です。今までの歩みをさらに実り豊かなものとするために、キリストを通して、父なる神につながりましょう。私たちは見た目の実り以上に、キリストの物差しにかなった実りを神にささげる民なのです。

復活節第6主日(ヨハネ 15:9-17)